
 ≪原著≫

保育所児の保育士に対するアタッチメントの特徴 —母子関係と比較して—

近藤清美

Characteristics of Attachment Relationship between Infants and their Caregivers in Day Care Centers : Comparison with Mother-Infant Attachment

Kiyomi KONDO

Abstract : This study examined the characteristics of attachment relationship between infants and their caregivers in day care centers in comparison with mother-infant attachment. Twenty one infants reared in the day care centers and 35 infants reared only with their mothers participated in this study. The results indicated that there were not any differences in attachment security between the groups. However, the infants reared in day care centers showed crying more as a tool to seek help when distressed but were more self-sufficient in other settings. There were no clear concordance between mother-infant attachment and caregiver-infant one in this sample although further research will be needed owing to the small sample size.

Key words : アタッチメント (attachment), 保育所 (day care center), 保育士との関係 (infant-caregiver relationship)

はじめに

近年、女性の社会進出が急速に進み、それに伴って少子化が問題になっている。少子化の原因は様々あるが、女性の社会進出が進む一方で、子育てをしながら女性が仕事を続けうる子育て環境の不備が背景にあることは間違いない。そうした子育て環境の整備や子育て支援の一つとして注目されているのが乳児保育である。

乳児保育は文字通り、産後間もない赤ちゃんを母親に代わって専門の保育士が保育することである。乳児保育を行うことは、乳児にとって母親の役割を果たす対象を複数持つことであり、かつ、家庭保育とは異なって、複数の同年代の赤ちゃんを一人の保育者が担当することで、一人の赤ちゃ

んに掛ける世話が分散することを意味する。したがって、アタッチメント理論の立場から乳児保育には早くから懸念が訴えられてきた (e.g. Bowlby, 1951; Anderson, 1980)。初期の研究は、多くの場合、大学の付属保育所など設備やスタッフの整ったところで行われたために、乳児保育が子どもの発達に問題となる影響を残すという結論は得られなかった (Belsky & Steinberg, 1978; Caldwell, Wright, Honig & Tannenbaum, 1970)。しかし、2歳以前に保育所に入った場合 (Bleher, 1974; Lamb, Sternberg & Prodromidis, 1992) や、週20時間以上の長時間保育を受けた場合 (Belsky & Rovine, 1988) は、母子間のアタッチメントが不安定になりやすく、貧困層に属する母親の場合、そのリスクが高まる (Vaughn, Gove & Egeland, 1980) といった研究がなされ、保育の開始時期や

保育時間、さらに、保育所の育児環境の質によっては、母子間のアタッチメントに影響を及ぼすことが明らかにされた。Belsky (1990; 2001) は、乳児期から保育所で長時間の保育をうけることで、母子関係が不安定（特に、回避型）となり、後の子どもの社会性の問題につながるという議論が巻き起こした。わが国でも、保育所の普及に伴い、保育所児は3歳時点で不安定なアタッチメントが形成され、社会性に問題を持つことが示された（繁多, 1983）。

こうした、議論に答えるべく、1990年代に、アメリカのNational Institute of Child Health and Human Development (NCHD) が全米10カ所、1357家族を対象に大規模な長期縦断研究を行い、乳児保育の影響を調べた。その結果、生後15ヶ月の時点でストレンジシチュエーション法によってアタッチメントを評価したところ、母子間のアタッチメントは保育時間や保育開始時期、保育所の質に関わらず、もっぱら、母子の関係性に依存することが明らかとなった。もっとも、母親の感性が低いと、保育所の質の低さや保育所を頻繁に変わることが、アタッチメントの発達のリスク要因になることも明らかにされた (NICHD Early Child Care Research Network, 2005)。また、イスラエルの研究 (Sagi, Koren-Kariem Gini, Ziv & Joels, 2002) では、保育所の保育の質の低さがアンビバレントなアタッチメントに関連した。結局、乳児保育そのものが母子間のアタッチメントの発達を妨げるものとは言えないが、保育所の質によってはリスク要因となるという結論である。

一方、アタッチメント研究において、乳児は早い時期から母親だけでなく複数の対象に対してアタッチメントを形成することが知られている (Ainsworth, 1967)。保育所の保育士は乳児にとって主要なアタッチメント対象になる可能性がある。Howes (1999) は、母親以外がアタッチメント対象となる条件として、1) 身体的・情緒的ケアをしていること、2) 子どもの生活の中に一貫して、持続して存在していること、3) 子どもに対して情緒的に投資していること、の三点をあげ

ている。保育士はこの基準に合うと言える。保育士が主要なアタッチメント対象であるなら、保育士に対するアタッチメントは乳児の社会・情緒的発達に重要な意味を持つことになる。

複数のアタッチメント対象に対するアタッチメントの形成については様々な議論がある。まず、Bowlby (1969) が提唱したように、乳児はまず特定のアタッチメント対象（通常、母親）にアタッチメントを形成し、それを鋳型としてそれ以外の対象に対するアタッチメントを形成するという説がある。ある程度年齢が行くと、アタッチメントは表象として内面化され、子どもはアタッチメントに関する内的作業モデル (Internal Working Model; 以下IWM) をもつようになる。IWMについて、Bretherton (1985) は、階層的組織化モデルをたて、もっとも顕著なアタッチメント対象との表象がもっとも影響力があると考えた。これは、Bowlbyの「鋳型説」を一步進めたものであるが、複数の対象へのアタッチメントの形成に際して、母親とのアタッチメントの影響が大きいとするものである。一方、van Ijzendoorn, Sagi & Lamberson (1992) は、すべてのアタッチメント関係が一つの表象として統合的にまとめられるとして、統合的組織化モデルを唱えた。このモデルでは、どの対象に対するアタッチメントも対等にIWMに影響すると考える。さらに、Howes (1999) では、各対象へのアタッチメントはそれぞれ独自のIWMを形成し、それぞれ異なる発達側面に影響するとする独立的組織化モデルを唱えた。いずれのモデルが妥当であるかはまだ検討の余地がある。また、社会や文化によって異なる養育システムの中でどのモデルが適合するのかは異なるのかもしれない。つまり、Bowlbyが活躍した第二次世界大戦後の専業主婦がもっぱら子どもを育てる状況であれば、鋳型説は妥当であったかもしれないが、女性の社会進出が進み、乳児が複数の大人から養育を受ける現代社会では、特定の関係性が他の関係性に重要な影響を与えるとするモデルは妥当性を持たない可能性がある。

父母間のアタッチメントの一致度について、

Fox, Kimmerly & Schafer (1991) が11の研究についてメタ分析を行ったが、そこそこの一致が見られた。その理由として、子どもの気質が父母とのアタッチメント関係に寄与していると考えられることもできるが、Steele, Steele & Fonagy (1995) が示唆するように、母親とのアタッチメントが父親とのアタッチメントに影響するとすると考えると、階層的な組織化説を支持する知見である。ところが、母子間と乳児と保育士のアタッチメントを比較した場合、Goossens & van Ijzendoorn (1990) の研究のように、乳児が保育士と安定したアタッチメントを持つ割合は父母に対するものと同じ程度で、けして、乳児と保育士とのアタッチメントが父母のものに比べて不安定であるとは言えないが、両者は統計的には独立していた。つまり、母親に安定したアタッチメントを持っていても、保育士に対してもそうであるとは限らなかったわけである。また、イスラエルのキブツにおける研究でも母子間のアタッチメントとメタプレットへのアタッチメントは一致しなかった (Sagi et al. 1985)。さらに、Howes & Hamilton (1992) のアメリカにおける研究でも同じ結果であった。

Howesらは保育士とのアタッチメント関係について一連の研究を行っているが、その中でももっとも興味深いのは、乳児期から9歳まで縦断研究したものである (Howes, Hamilton & Philipsen, 1998)。その研究によると、母子関係は学校での教師や仲間との関係に影響を及ぼすことがなく、むしろ、乳児期の保育士とのアタッチメントが9歳時点での教師との関係に関連するというものであった。つまり、アタッチメント関係が文脈毎に独自に影響を及ぼすというわけであり、独立的組織化モデルを示唆するものである。

このように乳児の保育士へのアタッチメントは、母子関係とは独立に形成され、その後の発達への影響も独立的であるとする見解にたつならば、臨床的に非常に意義がある。近年、保育所は、単に保育に欠ける乳幼児の保育に当たるだけでなく、保育所指針に明記されているように、保育活動として、虐待の疑いのある子どもの早期発

見と子どもやその家族に対する適切な対応があげられ、育児困難な母親への育児支援やその補完的保育を担う役割を担っている。もし、乳児の保育士に対するアタッチメントが母親とのものと独立して形成されるなら、母親との間に安定したアタッチメントを形成できなかった場合でも、経験豊かで子どもの出した信号に敏感な保育者が保育に当たることによって、子どもに安定したアタッチメントの形成が可能となり、母子関係による不安定なアタッチメントの後の影響が緩和されることにつながる。つまり、保育所での保育士の役割が、単に代替の保育者という役割に終わることなく、積極的な子育て支援・発達支援の役割を持つことになる。現に、虐待を受けた子どもでも、療育的な保育を受けることで安定したアタッチメントを保育士に形成するという知見がある (Howes & Ritchie, 1998)。

本稿では、以上の知見をふまえて、わが国での保育所児の保育士へのアタッチメントの特徴を明らかにするために、乳児の保育士に対するアタッチメントを母子間のアタッチメントと比較するとともに、以下の問題を明らかにすることを目指す。

- 1) わが国の保育所は欧米に比べると週40時間以上とかなり長時間で、それに伴って、早番や遅番と様々な保育士が一人の乳児に関わることになるが、乳児の保育士に対するアタッチメントは、母子関係に見られるアタッチメントよりも希薄であったり、不安定であったりするのか。
- 2) 乳児の保育士に対するアタッチメントの安定性は母子間のもとの差がなくとも、アタッチメントシステムに使用する行動そのものには差異がないのか。
- 3) 同一の乳児の母親へのアタッチメントと保育者へのアタッチメントは一致するのかわらないのか。それは、母親へのアタッチメントの安定性によって変わるのか。

方 法

研究対象児；21名の保育所入所児と、35名の家庭保育児が研究の対象となった。保育所児は、札幌市とその近郊の認可保育所0歳児クラスに在籍し、少なくとも3ヶ月以上保育所に通っていた。家庭保育児は札幌交差縦断研究に参加している研究協力者で、札幌に在住していた。アタッチメントの評価時点での研究対象児の月齢は、13ヶ月から15ヶ月であった。

同一の乳児について、保育所と家庭の両方でアタッチメントを測定することが研究の目的からすると理想であるが、保育所児では家庭場面の観察は母親の仕事が忙しいためなかなか難しく、家庭保育児の多くが家庭にとどまっていたため、その条件に合う対象を見つけることは困難を極めた。しかしながら、研究対象児のうち、保育所児3名、家庭保育児3名、合計6名が保育所での保育士と母子間のアタッチメントを両方とも評価することができた。

手続き；保育所児においては保育士とのアタッチメントが、家庭保育児においては母親とのアタッチメントが、アタッチメントQ分類法（以下、AQS）によって評価された。

AQSは、WatersとDeane（1985）によって開発されたアタッチメントを評価する方法であり、行動評定法の一つである。ただし、通常の評定法は、各項目について評点をつけるのに対して、Q分類法では項目間を比較して項目を対象の行動特性を特徴的に表現する程度に応じて分類する。また、項目は文脈を込みにした行動特性として書かれているため、そうした行動が生じる状況であれば、様々な場面での観察に基づいて行うことができる。アタッチメント得点は、標準分類といわれる典型的に安定したアタッチメントを示す乳児を想定してなされた分類結果との相関値として算出される。標準分類は、他の概念に基づいて作成することも可能であり、本研究では、保育所では一人の保育士が複数の乳児を担当するために接触の

密度が低く乳児の依存性は低くなると考えられるため、Waters（1987）を用いて、依存性得点も併せて算出した。

本研究でのAQSのための行動観察は、これまでの研究結果を参考に、保育所や家庭場面で、睡眠や食事をのぞいた自由遊びや散歩にでかけるといった場面で、2名の観察者によって行われた。観察には、特に機器や筆記用具を用いず、自然な訪問者として振る舞い、参与観察をすることでAQSに関する情報を集めるようにした。

保育所では、主として午前中の自由保育と散歩などの設定保育を含む時間帯に、各子どもを個別に1時間半以上観察した。観察の信頼性を高めるために、原則として、2名の観察者が異なる時間に異なる場面を観察した。ただし、その一致度が低く観察の信頼性が低い場合、3回以上の観察が行われた。また、保育所では、観察中に担当者として乳児の世話に当たっていた保育士をすべてアタッチメント対象として想定し、保育所内の職員をすべて見知った大人としてAQSを行った。

家庭保育児の場合、家庭の都合があり、訪問は1回に限られたため、訪問に際しては、おもちゃなどを持参して様々な場面が生じるように積極的に関与して観察を行った。また、訪問中に、母親に所定の項目を用いて面接を行い、母親の注意が必ずしも子どもに行かない状態を作り、1時間半以上滞在し続けるようにして、1回の行動観察であっても十分な情報を得ることができるようにした。

観察者は、事前にAQSについて習熟してから観察を行い、いずれの場面においても、観察の信頼係数は、70以上であった。

結 果

1, 安定性得点, 依存性得点の比較

保育所での保育士に対するアタッチメント得点と、家庭での母親に対するアタッチメント得点と比較すると、前者の平均が0.208で、後者が0.204であり、Mann-WhitneyのU検定の結果（U＝

367.0), 有意差は見られなかった(表1). また, アタッチメント得点の分布をグラフに表した(図1)が, 特に偏りは見られなかった. 実際, 保育士に対するアタッチメント得点は, -0.395から0.706の間にあり, 母親に対するものは-0.429から0.545で, 最低点や最高点にも明確な差異はなかった.

一方, 依存性得点の平均は, 保育所児については-0.165であり, 家庭児では0.015であった. Mann-WhitnyのU検定の結果(U=256.0), 10%水準で家庭児の方がアタッチメント対象に対して依存性が高い傾向があることが示された.

2, 各項目の得点の比較

AQSは, 一種の評定尺度であるため, 項目の得点を通常の評定得点として処理することが可能である. そこで, 保育所児と家庭児の90項目の得点の平均をMann-whitnyのU検定で比較すると, 表2に見られるように29項目について有意差が示された. それらは, 1) アタッチメント対象との距

離や依存に関するもの(9項目), 2) アタッチメント対象の区別や見知らない人に対するもの(6項目), 3) アタッチメント対象に対する従順さ(4項目), 4) 泣きに関するもの(4項目), 4) おもちゃとの関わりや遊びに関するもの(6項目)であった. その結果, 保育所児は, 家庭児に比べると, アタッチメント対象に対して独立しており, 距離をとっていることが多く, 何でも自分でしようとする傾向があることがわかった. また, アタッチメント対象に対して従順であることも特徴的である. 一方, 保育所児はアタッチメント対象でない大人を代用することが可能であるが, お客さんに特に関心を見せなかった. さらに, AQSに含まれる泣きに関する項目の多くに差異が見られ, 保育所児は泣きを手段として用いて, いったん泣き出すと激しかった. 最後に, おもちゃ遊びにも差異があり, 保育所児はおもちゃを丁寧に上手に扱い集中して丁寧に調べていた.

3, 同一乳児の保育士と母親に対するアタッチメ

表1 保育所児と家庭児のアタッチメントと依存性の平均値(SD)

	保育所児	家庭児	U値
アタッチメント得点	0.208 (0.305)	0.204 (0.256)	367.0
依存性得点	-0.165 (0.362)	0.015 (0.364)	256.0+

+: p<0.10

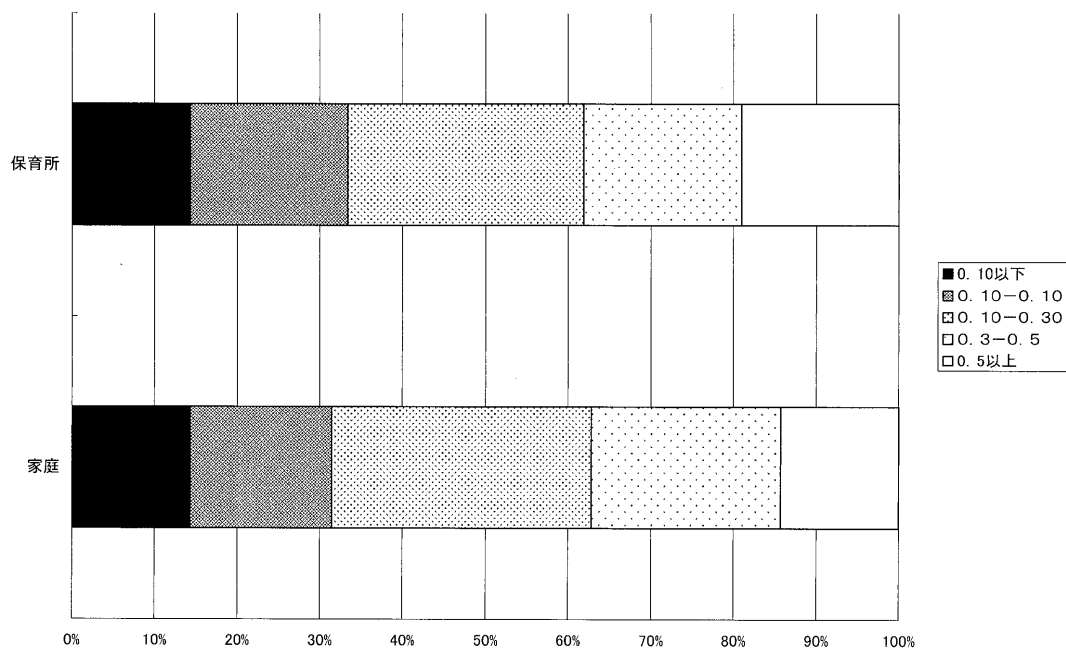


図1. 家庭児と保育所児のアタッチメント得点の分布

表2 AQSの各項目得点の比較 (有意差5%水準のあったもののみ)

項目	内容	保育所児	家庭児	U値
＜アタッチメント対象との距離や依存に関するもの＞ 9項目				
11	自分から抱きついたり, 甘えたりする.	6.37	7.76	220.0
25	一人で遊んでいると, 勝手にどこかへ行ってしまう.	6.31	4.76	193.0
31	注意を独り占めにしたがる.	3.52	4.70	252.0
36	遊びに出かけては戻ってくるのパターンを繰り返す.	4.10	5.83	228.0
43	いつもそばにとどまっている. すぐ, 戻ってくる.	4.14	6.37	190.5
63	自分でする前に誰かに手伝ってもらおうとする.	2.46	4.21	243.0
69	減多に手助けを求めようとしない.	6.84	5.10	227.0
73	いつも何かを持ち歩き, 機嫌が悪くなると抱きしめる.	3.38	4.70	154.0
90	遠く離れると, 後を追って近くで遊び続ける.	3.83	5.23	200.0
＜アタッチメント対象の区別や見知らない人に対するもの＞ 6項目				
3	アタッチメント対象以外の人になだめても受け入れる.	5.52	3.47	164.5
26	家族などに託して外出すると泣く.	2.47	4.01	169.5
48	初めての人にも物や渡したり分け合う.	5.62	7.07	192.0
51	お客さんにまつわりついて遊ぶ.	4.91	3.56	221.5
67	お客さんがいると, 皆の注意を集めたがる.	2.83	4.36	221.0
72	お客さんがほめると何度も繰り返してする.	4.68	6.70	151.0
＜アタッチメント対象に対する従順さ＞ 4項目				
18	提案として言われただけで, すぐに従う.	5.28	3.87	205.0
19	持ってきてくれるように言うに従う.	6.53	4.96	202.5
32	「ダメ」というとすぐにしていることをやめる.	5.00	3.71	214.0
41	ついてくるように言うとそのようにする.	6.31	5.40	208.0
＜泣きに関するもの＞ 4項目				
8	いったん泣き出すと, 激しく泣く.	4.90	3.07	225.0
34	アタッチメント対象が立ち去ったことで機嫌が悪くなったとき, その場に座り込んで泣く.	4.94	3.84	229.5
81	望むことをやってもらう手段として泣く.	6.64	5.24	242.0
88	何かで機嫌が悪くなると, その場に座り込んで泣く.	5.68	3.49	192.5
＜おもちゃとの関わりや遊びに関するもの＞ 6項目				
4	おもちゃやペットを優しく大切に扱う.	4.19	3.06	226.0
27	アタッチメント対象がからかうと笑う.	6.87	5.77	206.5
29	誰かが話しかけても気がつかないくらい遊びに熱中する.	5.51	4.00	217.0
40	新しいおもちゃを丁寧に調べる.	5.52	4.20	243.0
52	小さな物をうまく扱えない.	4.95	3.59	227.0
85	新しい活動やおもちゃに強く引きつけられる.	4.90	6.70	210.5

ントの比較

表3に見られるように, 保育士と母親に対するアタッチメントの安定性得点の順位相関は0.029

であり, 全く関連がなかった. また, 各乳児毎に保育士と母親に対するAQSの90項目の相関を調べると, -0.430 から 0.604 まで様々であった. し

表3 同一乳児における保育士と母親に対するアタッチメントの比較

対象児	対保育士	対母親	対保育士-対母親 項目得点の相関
保育所児A	-0.394	-0.060	0.198
保育所児B	0.354	0.307	0.604
保育所児C	0.186	-0.094	-0.530
家庭児A	0.542	-0.306	-0.069
家庭児B	0.212	0.179	0.451
家庭児C	0.238	0.524	0.460

かし、この値が、0.40以上の中程度の相関を示していた3名について、母親に対するアタッチメントの安定性得点は、ほぼ平均点以上であり、高い方に属していた。また、この3名は、保育士に対するアタッチメントの得点もほぼ平均以上であった。一方、母親に対するアタッチメントの安定性得点が低い3名については、保育士と母親に対するAQSの項目の相関が低かった。しかし、保育士に対するアタッチメントの安定性は必ずしも低いわけではなく、家庭児Aの様に高い値を示す場合があった。

考 察

本研究では、保育所児の保育士に対するアタッチメントの特徴を明らかにすることを目的とした。アタッチメントの安定性に関しては、母子間におけるアタッチメントと本質的な差異は見られなかった。一般的に、保育所では、一人の保育士が複数の乳児を担当することとなり、家庭保育と比べると、乳児と保育士の接触が限られることが予測される。また、勤務時間の関係で早番や遅番があり、一人の乳児に複数の保育士が入れ替わり立ち替わり関わることとなり、安定したアタッチメントが形成されにくいと考えられる。しかしながら、本研究が示すように、ある程度の期間、保育所に在籍し、その間に継続した関わりを保育士と持てる限り、保育所児も家庭児と同じように主要な大人に対してアタッチメント関係を結び、そのアタッチメントの質もけして不安定なものでは

ないことが示された。この結果は、Goosens & van Ijzendoorn (1990) と一致するものである。ただし、Barnas & Cumming (1997) の研究が示すように、保育士がめまぐるしく変化する状況では安定したアタッチメントの形成が望めないのは言うまでもないことであろう。一方、保育士は専門的な教育を受け、育児のプロといえるのであるから、安定したアタッチメントを乳児に形成できるのは当然であるとする議論もあり得る。本研究の結果から、保育士であっても、母親の場合と同様、極端に不安定なアタッチメントを形成する場合があることがわかった。この問題は後に再度、議論したい。

従来、保育所児の保育士に対するアタッチメントは、アタッチメントパターンやアタッチメントの安定性について検討されてきたが、行動レベルで同一であるどうか検討されてこなかった。家庭とは異なり一対一の関係を排他的に持つことができない保育所では、アタッチメントの質が同じであってもそれに用いられる行動方略が異なる可能性がある。

まず、本研究が明らかにしたことは、家庭児と比べて、保育所児はアタッチメント対象に対して独立していることである。それは、AQSの依存性得点が保育所児の方が低い傾向を示したことに見られるとともに、個々の項目の比較でも、保育所児はアタッチメント対象にあまり手助けを求めず、近接することがなかった。そのため、アタッチメント対象が遠くに行くと、ついて行くといった行動(項目90)や、探索に出かけては戻ってくるといったパターンを示す(項目36)といったアタッチメントの安定性の鍵となる行動であっても、保育所児では特徴的に示す行動とは言えなかった。それでも、保育所児のアタッチメントの安定性が家庭児と変わるところがなかったのは、危機的場面でアタッチメント対象を安全基地として利用する点では差異がなかったからと考えられる。逆に言うと、日常場面で、アタッチメント対象と一見、疎遠な関係であっても、いざ、問題が発生したときにアタッチメント対象を安全基地と

して適切に利用できるのであれば問題がないということである。それを反映しているのか、保育所児はおもちゃにじっくり丁寧に取り組み、一人遊びがうまい傾向が伺われた。つまり、保育所の環境では、一人の乳児に掛ける保育士の注意が限られているため、特に問題が生じない限り、乳児はアタッチメントシステムを活性化させないで自立的に過ごす方略をとっているものといえるだろう。

さらに、保育所児では、担当保育士以外に様々な職員が乳児と関わる機会があるためか、主要なアタッチメント対象でない人から容易に世話を受ける傾向があり、この点で、家庭児とは異なっていた。さらに、お客さんに対して特に関心を払うことがなかった。これは、保育所では他児の母親を含めて様々な見知らない大人と出会う機会が多いことが影響していると考えられる。家庭児であれば、お客さんへの反応は、人見知りの程度を示すばかりでなく、アタッチメント対象を信頼して、あえて怖いものに立ち向かうというアタッチメントの安定性を示す重要な指標となるが、保育所では一概にそのようにはいえない。むしろ、保育所の文脈では、保育士でない大人に注目し盛んにアピールを示すことは、必要な世話を保育士から受け取れないための代償行動といえるかもしれない。なぜなら、保育所内で安定したアタッチメントを形成していれば、問題となる脅威がない限り、大人を相手にしないで自立的に過ごし、遊びについては、あえて見知らない大人を相手にしなくても、年長児を含めて他児を相手に遊びができるからである。

最後に、保育所児に特徴的に見られ、家庭児と異なる行動として、アタッチメント対象に示す泣きの行動がある。保育所児は、困ったことがあると泣いて訴え、手段として泣きを用いていた。また、泣くときは激しく泣いてしっかり訴える点で、家庭児とは異なっていた。この行動は、不安定なアタッチメントに特徴的な行動である。なぜなら、アタッチメント対象を信頼していれば、わずかな信号を発するだけで反応してもらえると予

期し、泣きを手段として用いる必要がないからである。しかし、保育所場面では、必要な世話を受けるためには、はっきりとした信号を発しなければ、多様な活動が生じている中で聞いてもらえない可能性がある。そこで、泣きを手段として用いてしっかりアピールすることが、たとえ、安定したアタッチメントを形成している場合でも身に付けているものと考えられる。ただし、このことは保育所児が泣くことが多く、いったん泣き出したら、なかなか止まらないということの意味するものではない。保育所児の泣きの頻度は家庭児よりも少ないことがわかっている(根ヶ山・星・土谷・松永・汐見, 2005)。保育所児は、保育所の環境に合わせた適応的な方略として、困ったことが生じた危機的場面においてのみ、アタッチメント対象に的確な信号を発するために、泣きを手段に用いていると言ってもいいであろう。

以上のように、保育所児の保育士へのアタッチメントは、保育所の環境に合わせて、必要な場面での的確な世話を受けることができるように、家庭児とは異なる行動として現れることが明らかにされた。そのことが、不注意な観察者から見ると、保育所児はアタッチメント対象を無視するように振る舞い、泣きが激しいために、泣くことが多いと見られる理由になっているのかもしれない。しばしば誤解されるが、アタッチメントは距離や接触の頻度で評価されることができない概念であり、アタッチメントにとって重要なのは、危機的場面でいかに安心感を得ることができるかであり、それが保証される環境であれば、一対一の排他的な関係を持てなくても問題はないということである。

本研究が目指したもう一つの目的は、母子間のアタッチメントと保育所での保育士のアタッチメントの関係を明らかにすることであった。この点については、対象者の数が限定されたため、暫定的な結論しか得ることができなかったが、Goossens & van Ijzendoorn (1990) や Sagi et al. (1985), Howes & Hamilton (1992) などの従来の研究が示したように、本研究でも、両者には関連

が見られなかった。しかし、家庭での母親に対するアタッチメントが比較的安定している乳児に限れば、母親と保育士とで同じような行動を示し、保育士に対しても安定したアタッチメントを形成していることがわかった。一方、母親に対して不安定なアタッチメントを形成している場合、必ずしも保育士に対するアタッチメントが不安定であるとは限らず、かなり安定したアタッチメントを形成する場合もあることが明らかとなった。また、こうした乳児では、個々の項目から見ても、母親と保育士とでは異なる行動を示すようであった。

この結果は、安定したアタッチメントを母親との間に形成していれば、Bowlby (1969) が提唱したようにそれが鋳型として働く可能性を示唆しているが、不安定な場合、新しいアタッチメント対象と独立的にアタッチメントが形成される可能性を示すもので、非常に興味深い。たとえば、家庭児Aは、母親に対しては非常に不安定なアタッチメントを示し、家庭訪問の場面ですべたり、母親に援助を求めることができず、その場で泣き出したり、母親との関係がスムーズではなかったが、保育所では、担当の保育士を安全基地として適切に利用し、積極的に探索に出かけ、誰に対しても愛嬌がいいが、問題が生じたときには自ら担当保育士に援助を求めることができていた。つまり、母親とうまくいなくても、専門的な教育を受け、敏感な養育ができる保育士が世話をすれば、安定したアタッチメントをその保育士と結ぶことができることを意味する。

一方、保育士に対してであっても母親と同様に極端に不安定なアタッチメントを形成する場合が見られた。たとえば、保育所児Aは、保育士とのアタッチメントの安定性がもっとも低い乳児である。この児は保育所内で様々な場面で泣いて訴え、泣いても自分から保育士に駆け寄ることがなく、かんしゃくという形で保育士に怒りを発することが多かった。担当保育士も対応に困り、泣くままにしておくことがあった。しかし、同じ保育士が他の乳児に対して同様の極端に不安定なア

タッチメントを形成しているわけではなかった。同じ保育士であっても、担当する乳児に異なるアタッチメントを形成することから、子どもからの影響が考えられる。たまたま、保育所児Aは、母親とのアタッチメントの安定性も低く、そのことが保育士と安定したアタッチメントを形成しにくくしている可能性の一つには考えられる。さらに、乳児の気質の影響が考えられる。とりわけ、Thomas&Chess (1977) が示したように、乳児の気質が当該の保育士が提供する保育環境と不適合を起こしている場合に、極端に不安定なアタッチメントが形成される可能性がある。この点の検討が今後の課題である。おそらく、保育所の保育士は、それぞれの乳児に対してそれぞれ独自の関係を結び、アタッチメントはその関係性が反映されているものと考えられる。したがって、ある乳児に非常に安定したアタッチメントを形成できても他の乳児に同じようなアタッチメントを形成しないこともあるのかもしれない。また、それは保育体制にも依存する問題であり、入所している乳児の月齢の組み合わせによっては、特定の乳児に手を掛けられず、いくら優れた保育士であっても、安定したアタッチメントを形成できない状況に追い込まれる可能性もあり得ると言えるだろう。残念ながら、本研究では、乳児のアタッチメントを評価しただけであるため、個々の乳児に保育者がどのように区別して対応しているかは明らかではない。この問題に答えることも残された課題といえるだろう。

今後、乳児のアタッチメントに対応した保育士の保育行動を明らかにすることで、保育所における乳児の保育士とのアタッチメントの発達過程を明らかにしていきたいものである。

本研究は、平成16年度日本学術振興会・科学研究費（基盤研究（c））課題番号17530482：研究代表者池邨（近藤）清美）の助成を受けた。本研究に参加協力していただいた保育所と赤ちゃん、ご両親に心よりお礼を申し上げます。

参考文献

- Ainsworth, M. D. S. 1967 *Infancy in Uganda : Infant care and the growth of attachment*. Johns Hopkins University Press.
- Anderson, C. W. 1980 Attachment in daily separations : Reconceptualizing day care and maternal employment issues. *Child Development*, 51, 242–245.
- Barnas, M. V. & Cummings, E. M. 1994 Caregiver stability and toddlers' attachment-related behavior toward caregivers in day care. *Infant Behavior and Development*, 17, 141–147.
- Belsky, J. 1990 Parental and nonparental child care and children's socioemotional development. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 885–903.
- Belsky, J. 2001 developmental risks (still) associated with early child care. *Journal of Psychology and Psychiatry*, 42, 845–859.
- Belsky, J. & Rovine, M. J. 1988 Nonmaternal care in the first year of life and the security of infant-parent attachment. *Child Development*, 59, 157–167.
- Belsky, J. & Steinberg, L. D. 1978 The effect of day care : a critical review. *Child Development*, 49, 929–949.
- Blehar, M. C. 1974 Anxious attachment and defensive reactions associated with day care. *Child Development*, 45, 683–692.
- Bowlby, J. 1951 *Maternal care and the growth of maternal health*. Geneva : World Health Organization.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss, Vol.1, Attachment*. Basic Books (Revised edition, 1982)
- Bretherton, I. 1985 Attachment theory : Retrospect and prospect. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.) *Growing points in attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development (Vol.50), 3–35.
- Caldwell, B. M., Wright, C. M., Honing, A. S. & Tanenbaum, J. 1970 Infant day care and attachment. *American Journal of Orthopsychiatry*, 40, 397–412.
- Fox, N. A., Kimmerly, N. L. & Schafer, W.D. 1991 Attachment to mother/attachment to father : A meta-analysis. *Child Development*, 52, 832–837.
- Goosens, F. A. & van Ijzendoorn, M. H. 1990 Quality of infants' attachment to professional caregivers : Relation to infant-parent attachment and daycare characteristics. *Child Development*, 51, 832–878.
- 繁多進 (1983). 保育園児および家庭児のアタッチメントの発達に関する研究. 周産期医学、13号、臨時増刊号「母子相互作用—周産期医学から見た育児の原点—Pp. 2213–2217.
- Howes, C. 1999 Attachment relationships in the context of multiple caregivers. In J. Cassidy & P. Shver (Eds.) *Handbook of attachment*. Pp.671–687. New York : Guilford.
- Howes, C. & Hamilton, C. E. 1992 Children's relationships with caregivers : Mothers and child care teachers. *Child Development*, 63, 859–866.
- Howes, C., Hamilton, C. E. & Ohiloen, L. C. 1998 Stability and continuity of child-caregivers and child-peer relationships. *Child Development*, 69, 418–426.
- Howes, C. & Ritchie, S. 1998 Changes in child-teacher relationships in a therapeutic preschool program. *Early Education and development*, 9, 411–422.
- Lamb, M. E., Sternberg, K. J. & Prodromidis, M. 1992 Nonmaternal care and the security of infant-mother attachment ; Reanalysis of the data. *Infant Behavior and Development*, 15, 71–83.
- 根が山光一・星三和子・土谷みち子・松永静子・汐見稔幸 (2005). 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣き : 保育士による観察記録を手がかりに. 保育学研究, 43号, 179–186.
- NICHD Early Child Care Research Network (Ed.)

- 2005 *Child Care and Child Development*. New York : Guilford press
- Sagi, A., Lamb, M., Lewkowicz, K., Shoham, R., Dvir, R. & Estes, D. 1985 Security of infant–mother, infant–father, infant–metapelet attachment among kibbutz reared Israeli children. In I. Bretherton, & E. Waters. (Eds.), *Growing points in attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development (Vol.50), 257–275.
- Sagi, A., Karen–Karie, N., Gini, M., Ziv, Y., & Joels, T. 2002 Shedding further light on the effects of various types and quality of early child care in infant–mother attachment relationship : The Haifa study of early child care. *Child Development*, 73, 1166–1186.
- Steele, H., Steele, M. & Fonagy, P. 1995 Associations among attachment classifications of mother, father, and their infants. *Child Development*, 57, 571–555.
- Tomas, A. & Chess, S 1977 *Temperament and development*. New yrok : Brunner/Mazel.
- Vaughn, B. E., Gove , F. & Egeland, B. 1980 The relationship between out–of–home care and the quality of infant–mother attachment in an economical disadvantaged population. *Child Development*, 51, 1203–1214.
- Van Ijzendoorn, M. H., Sagi, A., & Lambermon, M. W. E. 1992 The multiple caretaker paradox : Data from Holland and Israel. In R. C. Pianta (Ed.) *Beyond the parent : The role of other adults in children’s lives. New directions for child Development*, 58, 5–24. San Francisco : Jossey–Bass.
- Waters, E. 1987 The attachment Behavior Q–sort (Revision 3.0). *Unpublished manuscript, State University of New York at Stony Brook*.
- Waters, E. & Deanes, K. E. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships : Q–methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters. (Eds.) , *Growing points in attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development (Vol.50), 41–65.